

---

# ファミレスナイト

極楽天

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファミレスナイト

### 【Nコード】

N9459A

### 【作者名】

極楽天

### 【あらすじ】

夜中のファミレスで男が遭遇した奇妙な出来事とは……？

夜中のファミレスというのは思ったより客がいるもんだな。

入店を知らせるチャイムを耳にしながら、店内を見渡す。二人組の男や、テーブルに突っ伏しているサラリーマン風の男など、あわせて六人くらいの客が店内で時間をもてあましていた。時間が時間だけに誰もいないと思っていたので、これは意外だった。

会社で嫌なことがあり、行きつけのバーで独り愚痴を肴に酒を飲んでいると、とつくに終電もなくなっており、途方にくれていた俺は、あと数時間をここでつぶそうと思って入ったのだった。

「空いてるお席どうぞ」

と、やる気のないおばさんの店員に促され、俺はできるだけ人がいない、窓際に席をとった。さすがに店内はかなり静かで、普通の声で話をする和其他の客に聞こえそうなくらいだった。現に二人組みの男はひそひそと声を低めて話をしていた。

あと三時間弱か。

途方もなく長く感じられる時間だった。俺も突っ伏して寝ていた方がよさそうだ。

注文をとりに来た若い男のウェ이터に、アイスコーヒーを頼みとりあえず羽織っていたスーツを横に置いた。外は熱帯夜というのに相応しい気温だったが、店内は少し寒いほどだった。これだけ温度差があれば、そりゃあ身体を壊す人もでるだろう。

ちょうどウェ이터がコーヒーを持ってきたとき、また客を知らせるチャイムがなった。何となく、そちらの方に目をやると大学生らしき男の三人組だった。その中の一人が、少し興奮気味に二人に向かって話し掛けている。

「絶対いた。間違いないって、俺マジ見たもん」

髪をつんつんに立て、黒ぶちのメガネをかけた男がまくし立てるように、他の二人にしゃべっている。二人は散々その話を聞かせら

れていたらしく、少しうんざりした顔をしていた。

「いや、何もいなかったって」

それをあつさり否定する茶髪の少し小さめの男。他の二人に比べ、顔つきも幼く見える。その言葉に対し、メガネの男はますますヒートアップしていく。恐らくかなりの量の唾も飛んでいることだろう。その二人を横目に、髪を短く刈った男が、店員に軽く会釈をして、話し続ける二人を無視して、さっさと席につく。それを見て、喧喧諤諤と話を続けていた二人も、その後が続いた。今まで静かだった店内は一気に騒がしくなり、突っ伏していた男も何事かと目をこすりながら起きた。

「マジで。マジで見たの。髪の長い、何か肌の白いさあ」

「何それ。べたべたじゃん」

「んなこと言ったってよ。あっちがそういう格好、好きなのかもしれないべ」

「あっちの世界にも流行があるってか」

「そんなんじゃないけどよ。話、茶化すなって」

相変わらず二人は議論が続いている。そんな様子を尻目に髪の短い男は、まばたきを繰り返しながら、伸びをしている。時間が時間だけに眠いのだろう。大きく一つあくびをしている。

「肌が白くて髪の長い女がよ。あのトンネル抜けたところにいたんだって」

もういい加減にしてくれといった感じに、茶髪の男は大きく息を吐き、そして向かいの席に座る髪の短い男に話し掛けた。

「タツ、見た？」

タツと呼ばれた男はゆっくりと首を横に振るだけで、言葉は発しなかった。それ見たことかと茶髪の男は、メガネの男に得意そうな顔を浮かべた。

「だって、タツ寝てたじゃん。見るわけねえし」

「これで見派と、見ない派は一对二になりました」

「は？ だからタツをカウントに入れんなって」

「んなこといつてもねえ。民主的に行こうぜ、ノリ」

「お前ねえ、いつでも真実は少数派なんだよ。ガリレオ先生を見るよ」

なんとも凄い会話である。聞こうとしなくとも、あれだけ大声で話されれば誰の耳にも届いているだろう。どうやら幽霊を見たとか見ないとかの話をしているようだ。ノリと呼ばれたメガネの男だけがその姿を目撃したらしい。

「ガリレオとお前は全然違うべ。お前はスズキノリアキつつう立派な日本人だわ」

「だーから。そこで話をそらすなっていうの」

その議論の最中、ウェイターが遠慮がちに水とおしほりを持ってきた。

その数四つ……？

髪の毛の短いタツ、メガネをかけたノリ、あとは茶髪の小さい男。

俺の目には三人に見えるのだが、どうして四つなんだ？

背中にならずかに悪寒が走る。

ウェイターはそれぞれの前に水とおしほりを置いていく。まずタツに、そしてノリ、茶髪の順に。最後に誰も座っていない席の前に、ゆつくりとそれらを置いた。ノリと茶髪はそのことに気づかず、まだ議論が続けている。タツは自分の隣に置かれた水に視線を向け、それからゆつくりとウェイターの方を見た。

「よくこいつのことが分かりましたね」

と、につこりと笑いながらウェイターに言った。

それに対し、ウェイターは黙って礼をし、また厨房の中に戻っていった。

その何とも不思議な光景を俺はまばたきもせずに、凝視していた。俺に見えない何かが、あそこに座っているのか。

さっきまでわずかだった悪寒は、大きく膨れ上がり、肌に無数のイボを立てた。どつと恐ろしさが身にこみ上げてきた俺は、急いで伝票を手にし、席を立った。幽霊とかそういうたぐいの話は信じて

いる方ではなかったが、こういう光景を見せられては、どうしようもない。一刻も早くここから離れたかった。

できるだけ冷静を装い、早足でレジまでいくと、さっきの店員が軽く頭を下げて、俺の伝票を手にとった。

きつとこの人にはあそこに誰かが見えているのだろう。そう思うと何だかこの男も恐ろしいもののように思えた。できるだけ視線を合わせないようにして、財布から千円札を一枚取り出し、釣りはいいですと言って出ようとした。するとまた客を知らせるチャイムとなり、その音に思わず「ひゃっ」と情けない声を上げてしまった。そんな俺を不審そうに見ながら、背の高い細身の男が入ってきた。男は店内をゆつくりと見渡し、人を探しているようだった。そして「あつたあつた。運転席の下に落ちてたよ」

と、右手に携帯を高々と上げ、さっきの三人組の男たちに向かって大きく手を振った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9459a/>

---

ファミレスナイト

2010年10月8日15時11分発行